

Title	福田博士著 現代の商業及商人
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.2 (1921. 2) ,p.302(146)- 304(148)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210201-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奴隸たる地位に置かれて居るが、之を脱して、自由人たる身分を占めることを望んで已まな

いと云つて居るのである。
思ふに國有論は英國に於て、獨り炭坑のみに主張されるのではない、鐵道に其他の資本的企業に同様の主張を生ずるのは、明白の數であるが、就中炭坑に關して、國有論の起り來つたのは何故であるか。英國戰後の經營から云ふと一年少くとも三億噸の出炭量を要する譯であるのは戰爭の始まる少し前から戰爭中に掛けて、出炭量は二億二三千萬噸を上下するのであつて然も其價格は非常に騰貴したのである、其處で當然の問題として起つて來るのは、何であるかと云へば、如何にして此の出炭量を増加し得るか、之れを増加させる條件として價格の騰貴を來さず、又賃銀其他の勞働條件を従前以上に維持して行くには如何にしたならば、宜しきかの

一事である。資本家の側に於ては出炭量の減少を以つて、勞働者の努力の不足に歸して已まな

福田博士著 現代の商業及商人

四六版三〇三頁大體閣發行
定價金壹圓九拾錢

本著は初め「商店雜誌」に連載せられ、「次いで「經濟學考證」中に収録せられたるものに卷末「戰後の世界と商人の任務」の一章を追加し、單行本として新裝上梓せられたるものなり。著者

の期する所は「商人道起つて武士道に代れるが如く、今や新たなる世界に於ては、更らに此の商人道に代る可き新たなる理想が暇々として進み來れることを明かにし、實業に従事し、若しくは之れに志す青年をして、現代に於ける商業の本質を正しく理解せしめ、而して之れに處する現代の商人たる可き者の任務が如何に重大なるかを會得せしめんとするに在るなり。

絢爛を極めたる博士の文は漸く將さに平淡の域に入らんとす。博士の饒舌は滔々説き去り、説き來つて、些の滯滞を見ず、筆を武士道に起して、商人道に進み、戰爭と商業、士魂と商魂、商略と軍略、財權と商權、及び舊式の商人と新式の商人との對偶を掲げ、現代に於ける商人の意義並びに任務を論じ、商業教育の根本義を闡明し、資本の意義と資本主義的社會の真相を啓示し、市場の擴張と商店の變化を述べ、景氣不

景氣の去來を説き、最後に結論として、戰時及び戰後の經濟社會に於て、現代商業の性質に著大なる變化起り、従つて向後の商人が新たなる任務を有することを叙して其の論を終り。而して其の間に於て經濟社會流轉變化の繪畫は讀者の眼前に殆んど目まぐるしきまでに展開し又た轉廻せらるゝなり。

凡そ吾人に知られたる現象の永續不變は總べて皆な相對的のものたるに過ぎず。吾人の眼には商業も商人も、現る可きの時に現れ、滅す可きの時に滅す可きものとして映ずるのみ。然れども、彼れ等が惟り一定の歴史的階段に於てのみ存續するものなりと云へる明白なる事實に由つて、彼れ等は其の現存しつゝある社會に於いて、其の重要な程度を減するものに非ず。吾人は彼れ等が資本主義的制度的下に、又た資本の援助の下に行ひ來りたる事業と成績と、而して

更らに多くの罪惡を認むると共に、自利的觀念より行ふ有價的財貨授受の世界より逸脱せんとして、先づ現時の經濟組織を改造せんとするの時、彼れ等は先づ第一に征服し去らる可きものなることを認めざるを得ず。吾人は此の點に於て博士が妮々として説述せる最初の十有餘章よりも、却つて卒然として筆を收めたる卷末の一章に於て、多大なる興味を感じ、著者が

商人といふものは、商業若しくは商人といふものを一日も早く、なくなるやうに、人文を進めて行くことに心を留めなければならぬものである。併し、この理想を實現し、この理想に向つて幾分でも進むといふのは、この社會に處して商人が最も多くその任務を盡し、最も活動し、最も忠實に、最も活潑に働くのでなければならぬ。この意味において、宗教家よりも、學者よりも、政治家よりも軍人よりも、否か一切の指導者階級にも勝つて商人の階級が重大なる指導責任を持つて居るものと吾輩は信じて居る。(二九六頁)と述べ、更らに

最良の製品を、最有利の條件を以て最低廉の値を以て需要者に供給するといふことが商人の最高の使命である。

の最高の使命を盡すといふことは商人なき社會、商業なき社會の實現を一日も早からしむる所以である。(二九七頁)と教へたる博士の意見に賛せざるを得ず。吾人は將に其の歴史的任務を完ふして、臆がて亡び行く可き運命の下に立てる商人階級が此の「道德教」を抱いて新たな相互協同の社會に進む可きことを祈りて止まず。(高橋誠一郎)

瀧本誠一著 「日本經濟史」

菊版四四三頁
國文堂發行
定價金六圓

去年は我が日本經濟史の研究者にとつて、兎に角外面的には收獲の多い年であつた。日本經濟史と題する著作が二つ迄吾人の前に提供されたと云ふことだけでもかなり意義がある。一つは竹越與三郎氏の編纂になる索引年表合せて九卷と云ふ大著作である。惜しいことには編纂の方

法宜しきを得なかつた爲めか、或ひは努力の眞摯を缺いた爲めか、徒に龍大の分量を有するに止まつたのは遺憾である。他の一つは今こゝに紹介しやうと云ふ瀧本博士の著述である。本書は前者に比すれば僅々一卷三八七頁(本文のみ)の小冊子に過ぎない。而も著者自身も「本書を日本經濟史と題するは餘りに大袈裟にして其名其の實に副はざるを恐る」と云ひ小題して「徳川氏封建制度の經濟的説明」としたと辯明されて居るが、若し書肆の強制するところでないとするならば、斯の如きは明かに不當である。そはともあれ本書が近世日本經濟史として如何なる内容、如何なる研究法を有して居るかを述べて是を江湖に紹介しやうと思ふ。

本書は全部十章よりなる。封建制度。法制の不統一。土地制度。徳川氏及諸大名の財政。貨幣問題。通商政策。徳川氏の道路交通政策。都

市の發達。四民の經濟狀態。封建時代の經濟思想等である。以上の目次を見ても大體其の一般を知り得るが、是等各項はそれぞれ獨立の論文であつて、經濟史そのものよりも寧ろ經濟史論の方が其の大部分を占めて居る。ある點に於いては福田博士の「日本經濟史論」以上に史論に多くの頁を費されて居る。此の點から見ても經濟史の題は不當ではないだらうか。然し乍ら斯の如きは博士が本書に用ゐた研究方法のある解釋から生じた必然の結果である。扉の裏にH. Leckyの「The political value of History」の一節を掲げ其の態度を示された博士は序文に於いて「余は大局に關係なき瑣細の事實を詮議考索することを好まず、社會の經濟的發達の蹤を辿りて、其の大綱を捉へんと欲するのである。特に某件の淵源を探り某事の本末を尋ぬるが如きは別に考證家又は典故學者のあるあり、余の末だ